

箕面の授業の基本

箕面市の「めざす子どもの姿」

- ★進んで学び合う箕面っ子
- ★健康でたくましく生きる箕面っ子
- ★つながり高め合う箕面っ子



すべての子どもたちに学ぶことの「楽しさ」「喜び」

「厳しさ」「大切さ」を伝えるために！

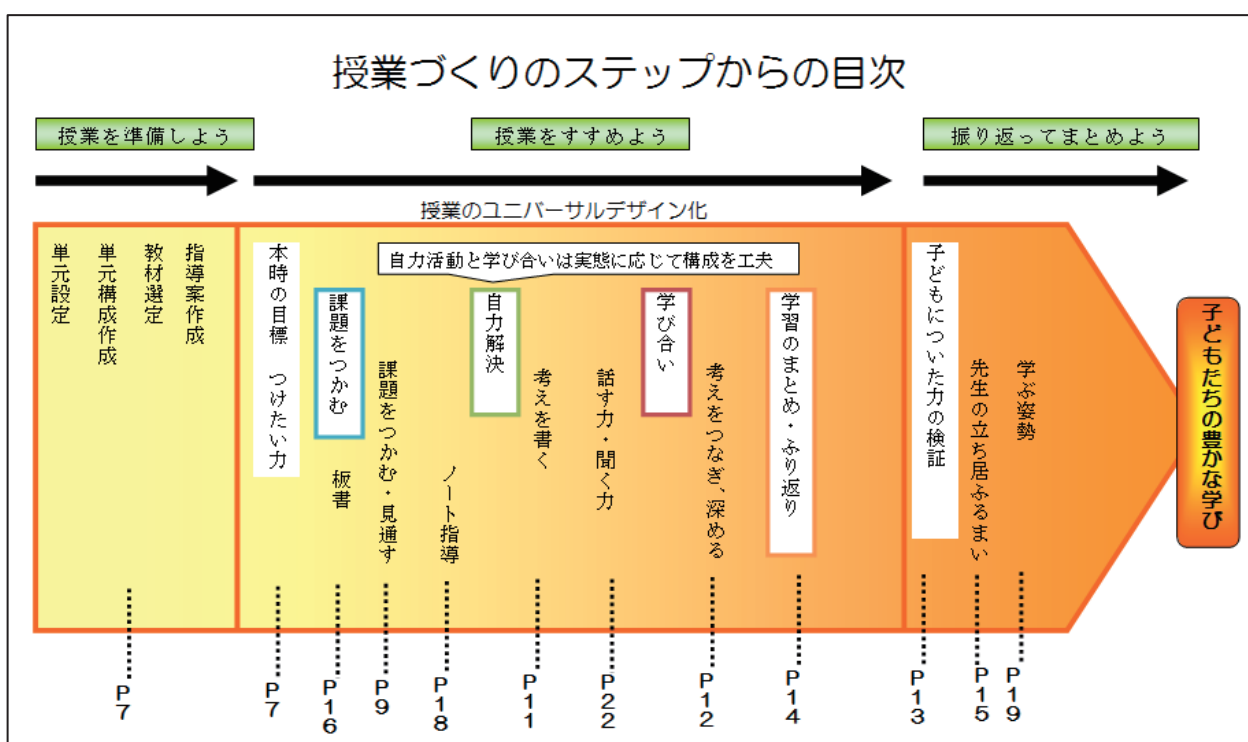


箕面市教育委員会



算面の授業の基本 目次

「算面の授業の基本」発刊にあたって	1
Ⅰ 算面市がめざす授業づくり	
1 学校に学びの文化を育む授業をつくる	2
2 授業のユニバーサルデザイン化	5
3 子どもの学びの連続性のために組織的に取り組む	6
Ⅱ 授業づくりのポイントと子どもに力をつけるために大切にしたい学習活動	
1 目標の明確化と単元づくり	7
2 大切にしたい4つの学習活動	8
① 課題をつかむ	9
② 自力解決	11
③ 学び合い	12
④ まとめ・ふりかえり	14
Ⅲ 授業を支える教員のスキル	
1 先生の立ち居ふるまい	15
2 授業の流れが分かる、構造化された板書	16
3 学習意欲を高めるノート指導	18
Ⅳ 系統的、継続的に育てたい子どものスキル	
1 児童・生徒の学ぶ姿勢	19
2 自分の考えを書く活動の手立てについて	20
3 「話す力」・「聞く力」	22



「箕面の授業の基本」発刊にあたって

－すべての学校、すべての教員が「授業の基本」をふまえる－

箕面市教育委員会

平成 19 年度（2007 年度）に全国学力・学習状況調査が始まって今年度で 6 年が経過しました。さらに、平成 24 年度（2012 年度）から箕面市独自で箕面子どもステップアップ調査を開始して、今年度で 2 年目となります。

それらの結果から、本市の子どもたちの学力は、全国との関係で一定程度高い状態にありますが、「自ら学ぶ態度」、「自分の考えを書く力」、「学習したことを活用する力」、「自分の考えや意見を説明し、発表する力」など、今という時代を生きる子どもたちに強く求められている重要な学力に課題があることが明らかになっています。

つまり、本市では、学習に取り組む「関心・意欲・態度」を醸成し、「思考力・判断力・表現力」を育てる授業の実践が喫緊の課題となっています。

そのため、箕面市教育委員会では昨年度および今年度にわたって、箕面市の教員・教育関係者による秋田県由利本荘市の小中学校への訪問を行い、組織的に取り組む授業づくり・学力向上の取り組みに学び、研修を深めてきたところです。

今回、こうした取り組みをふまえて、教育センターの「授業モデル等箕面スタンダードづくりに関する研究」部員の協力を得て、「箕面の授業の基本」をまとめました。内容は校種や教科を問わず、どの授業の授業者でも大切にしたい「授業の基本」となっています。

「箕面の授業の基本」について、すべての学校、すべての教員の共通理解のもと、各校の授業実践や授業研究に活用することにより、子どもたちにとってわかりやすく、力のつく授業になるものと確信します。

平成 26 年（2014 年）1 月 20 日

I 箕面市がめざす授業づくり

I-1 学校に学びの文化を育む授業をつくる

(1) 箕面市の子どもたちの学力の現状・課題

子どもたちが生きていく 21 世紀は、「知識基盤社会」の時代であると言われています。「知識基盤社会」の特質としては、①知識には国境がなく、グローバル化が一層進む、②知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる、③知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる、④性別や年齢を問わず参画することが促進される、などが挙げられています。

経済協力開発機構（OECD）は、多くの国々の認知科学や評価の専門家、教育関係者などの協力を得て、その時代を担う子どもたちに必要な能力を、「主要能力（キーコンピテンシー）」として定義付けました。具体的には、①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力、②多様な社会グループにおける人間関係形成能力、③自立的に行動する能力、という 3 つのカテゴリーで構成されています。

本市では、めざす子ども像の学力目標として『進んで学び合う箕面っ子』を定め、「箕面子どもステップアップ調査」を行っています。また、教育センターの研修、市教研の研究活動等を通して、授業研究を進めています。さらに各校でも研究部組織を軸に、「今の子どもたちに付けたい学力」を明確にして、授業研究に取り組んでいます。

しかしながら、本市の子どもたちには、学力に関して主に下の課題が見受けられます。

箕面市の子どもの学力の課題

○「自分の考えを書く力」

○「学習したことを生活で活用する力」

○「人に自分の考えや意見を説明したり発表したりする力」

「学校教育法第 30 条第 2 項」の学力の三要素のうちの

知識及び技能を活用して課題を解決
するために必要な

思考力・判断力・表現力

学習に取り組む

主体的な態度

課題1: 自分の考えを書く力

本市の子どもたちは、感じたことや経験したことを自由に書くことには、さほど抵抗感がないようです。しかし全国学力・学習状況調査の結果では、「条件」に即して書くことに、

子どもたちはかなりの抵抗感を示しています。また、調べて分かった事実に対する自分の考えを、理由や根拠を明確にして書くことにも苦手意識があります。

この課題解決のためには、日々の授業の中で言語活動を重視して、日常的に考えを書くことや、単元でつきたい力を明らかにして見通しをもち、繰り返し書く活動を行う必要があります。また書くことを他の領域と関連させることも大切です。

課題2:学習したことを生活で活用する力

高度経済成長時代にあつては、基礎学力の獲得が重視され、一定の学力をすべての子どもたちが身につけ、全体の学力を底上げすることが必要でした。しかし今の学力観では、一定の知識・技能を子どもたちに教えていくだけでなく、その知識や技能を、実際の毎日の生活場面でどのように使えばいいかも考えていく取組が必要です。

課題3:人に自分の考えや意見を説明する力、発表する力

さらに、子どもたちには今、日々の生活の中で直面するさまざまな状況に応じて、自らの力を総動員して応答していく学力が求められています。そのため授業では、人に自分の意見を説明する力、発表する力が求められています。

時代を担う子どもたちに必要な能力を育て、これらの課題を解決するには、本来の学びの楽しさ、喜びである、「課題を解決する中で自らの考えを発見したり、仲間と学び合う中で深め合ったりする学習方法」や、「子どもが主体の学習方法」への転換が求められます。

つまり、**箕面市がめざす授業は「課題解決的な学習」**なのです。

子どもたちに、学ぶことの「楽しさ」や「喜び」、「厳しさ」、そして「大切さ」を味わわせ、子どもの内側に学びに対する価値意識や、学校の中に学びの文化を育む授業を作りましょう。

(2)課題解決的な学習とは

私たちが日々直面する様々な問題に対して、自分の力を駆使して応答していくことが求められています。

たとえば、学習発表会や文化祭などの行事について話し合う場面になったとき・・・。

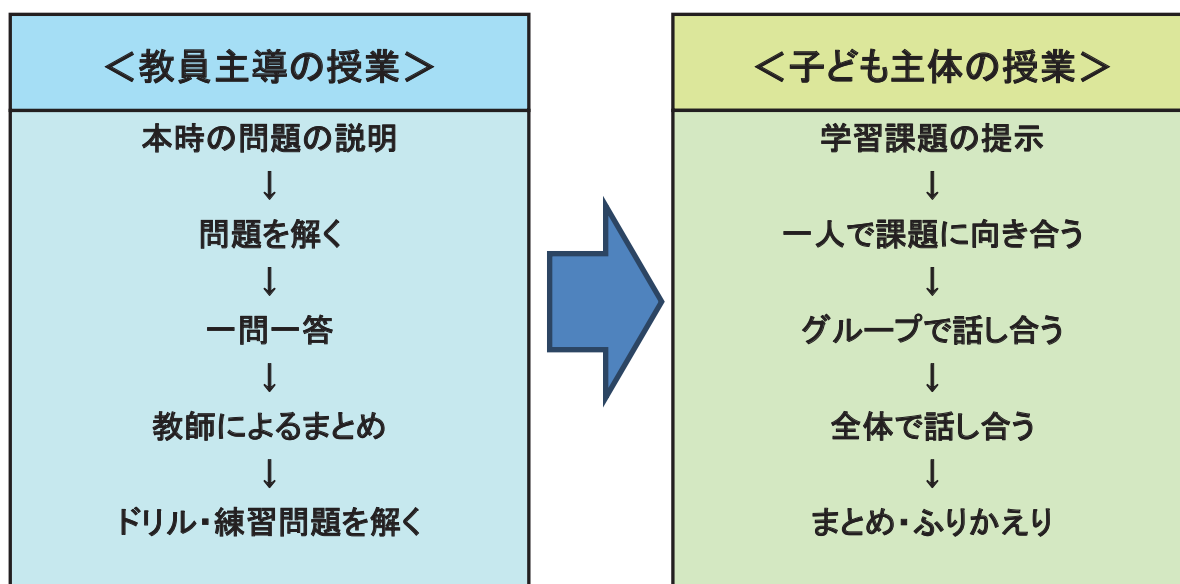
こうした状況を自分とは関係のない問題としてではなく、自分の問題として引き受け、考え、どうすればいいかを友だちと話し合い、自分なりの答えを見つけていく。このような意味で今必要とされているのは、問題に直面したときにどう対応するかを考える力というよりは、むしろ、自分に関わる問題を発見する力であるとも言えます。

これらの学習意欲や思考力・判断力・表現力は「教えて、練習させて、定着させる」授業だけでは、子どもたちが身につけることができません。なぜならばこのような力は子どもが内側に自ら育むものだからです。

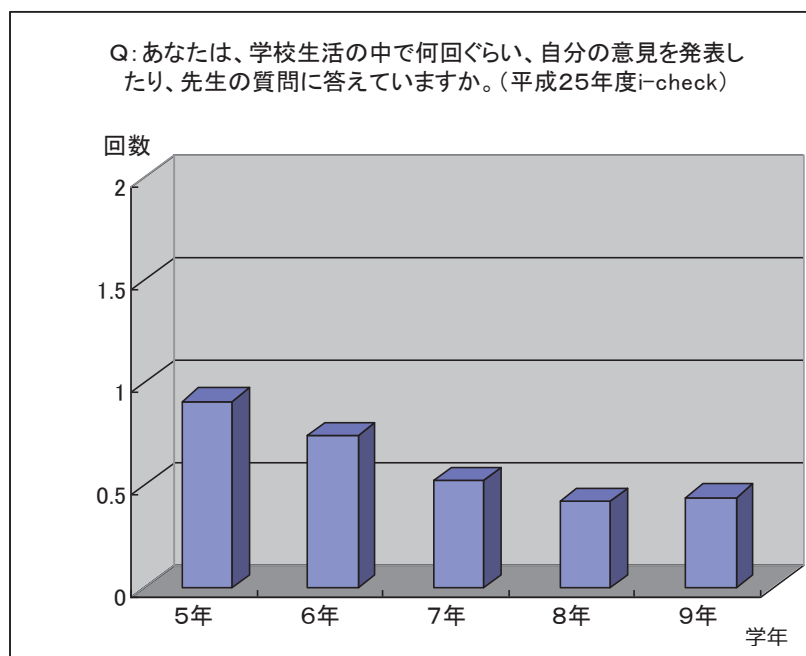
課題解決的な学習は、言語活動を重視して、子どもの思考の流れにそって学習の過程を組み立てたもので、子ども主体の授業を実現する有効な方法です。課題解決的な学習をふまえた授業によって、「**先生が教え込む授業**」から『**子どもが学びとる授業**』へ変えていくことができます。

(3) 子ども主体の授業

教員が主導する授業と子どもが主体となる授業を比較することで、課題解決的な学習と表裏一体となる「子どもの学びを軸とする学習活動」がどのようなものかが、よく見えてきます。



教員の使う時間が長いと、その間、子どもは教員の話の聞いたり、板書を写したりするなど、「受動的」になってしまいます。子どもの使う時間が長いと、子どもは考える、説明するなど、「能動的」に授業に取り組めます。



箕面市の授業ではどうでしょうか。左のグラフによると、学年が進むにしたがって自分の意見を発表する機会が減っています。

これだけで、すべてを判断することはできませんが、授業の中で、子どもの能動性を引き出す活動が、学年の進行とともに少なくなる傾向を読みとることができます。

そこで、知識・技能の習得と活用力の向上とは、1時間の授業というフレームの中では、次のようなとらえ方をしなければなりません。

『知識・技能が身につくことと、思考力・判断力・表現力を高めることは、同じ一つの授業で行われるものです。』

I-2 授業のユニバーサルデザイン化

通常の学級の中で気になる子どもがわかるような授業内容を考えていくと、他のどの子どもにもわかりやすくなります。一人ひとりを大切にした授業をおこなうために、工夫や少しの配慮をおこなう授業のユニバーサルデザイン化が求められています。

授業構成の工夫

- ねらいや活動を絞って、シンプルにする。
→丁寧な教材研究が必要です。
- 子どもにも見通しが持てるように学習の流れを提示する。
→「何を」「どんな順番で」「どのように取り組んでいくのか」
これらを導入で提示すれば、安心して学習ができます。
- さまざまな場面で全員が参加できることを意識して構成する。
→ペア学習やグループ学習をおこないます。

視覚情報の活用

- 視覚教材の利用
→絵や写真、デジタル教材など、視覚情報は理解が容易になります。
- わかりやすい板書
→チョークでの色分け、ノートと同じマス目の黒板など、どこを見ればいいのかのわかりやすくすると集中できます。
- 動作化
→身体を使ったり、体験を通したりして学習すると、わかりやすく覚えやすいものもあります。
- 環境の整備
→学習の妨げになる視覚情報はできる限り減らし、黒板周辺はすっきりとさせます。

指示、説明、発問

- 指示等の言葉はなるべく具体的でかつ単文にする。(一文一指示)
- 教員の説明が多くなりすぎないようにする。
→子どもの言葉での説明が学びを深めます。
- 終わりがわかる説明の仕方をする。
→「今から3つのことを話します。1つめは…」
- 注意を促す言葉は、短く、肯定的な表現を使う。
→授業中の声の大きさ、強さは状況に応じて変えましょう。
(禁止や否定の言葉が多いと学ぶ意欲を低下させてしまいます。)

認め合う学級集団づくり

- できたことを適切に評価し、学ぶことを喜びに。
→授業の中でこそ、子どものつながりを作ることを意識する。
- 机間指導を活用する。
→その子にだけ届くアイコンタクトなども活用できます。

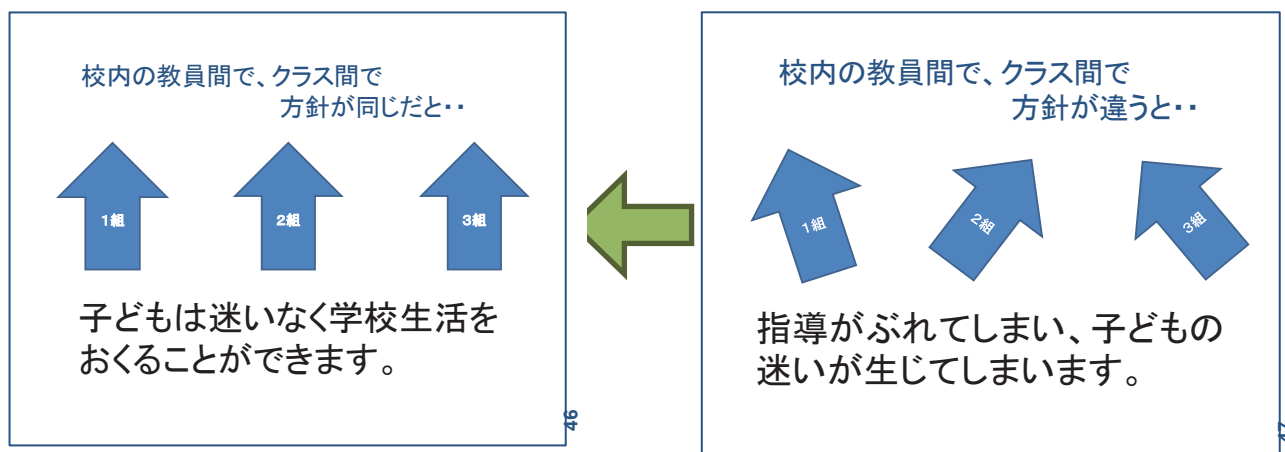
I-3 子どもの学びの連続性のために組織的に取り組む

秋田県由利本荘市への訪問では、授業づくりが授業者によって異なるのではなく、学校全体として組織的に行われている点に、多くの参加者が感銘を受けました。

組織的に授業づくりが進められることが、箕面市のすべての学校にいま強く求められています。それは小中一貫教育を進める箕面市の子どもの9年間の連続した学びを保障することにつながっていくからです。

基底となる授業規律を教員が共通認識を持って指導していくことが大事です！

子どもたちは、学年が変わった時などに、新しい先生の考え方や授業のルールを探ります。教員の大切にする授業規律や指導方針が違っていると子どもは正しいことが分らなくなるとともに、スキルを積み上げることができません。教員の方向性、ビジョンの共有が子どもの倫理観、規範意識を形成していきます。



全校で実施している学校教育自己診断において、学校の取組を個々の教員がどのように感じているのかを、教員向けのアンケートによって確認しています。いくつかの設問において、学校が組織的に機能しているかを量ることができます。

例えば、「児童・生徒による問題行動が起こった時、組織的に対応できる体制が整っている。」や「各分掌や各学年間の連携が円滑に行われ、有機的に機能している。」の問いにおいて、肯定的な回答している教員の割合が毎年増加していくようにすることが必要です。

Ⅱ 授業づくりのポイントと子どもに力をつけるために大切にしたい学習活動

Ⅱ-1 目標の明確化と授業づくり

ステップ1 単元全体を見通す

- ① 単元目標の確認
 - ・指導書だけでなく、学習指導要領解説も確認。
(学習指導要領解説は学習単元の設計図のようなものです。)
 - ・どんな教材があるのか教材の研究。
 - ・単元を貫く言語活動等も教科に合わせて考える。
- ② 子どもの実態を調べる
 - ・単元の内容に関わる子どもの生活経験や興味関心等を調べる。
 - ・既習内容やその把握状況を調べる。
- ③ 目標の明確化
 - ・学習後の目標とする子どもの姿を具体的に考える。
 - ・単元目標を達成するための教材選定や指導方法を考える。

ステップ2 単元指導計画と評価計画を立てる

- ① 指導時間を決め、指導計画を立てる。
- ② 毎時間の目標を明確化し、評価規準を決める。(4観点から絞って可能な限り1つに)
- ③ 目標が達成できたのかを見とる評価基準と評価方法を定める。

ステップ3 目標を達成するための授業の骨組みを考える

- ① 本時で子どもに獲得させたい力を明確に言語化する。
「この授業の目標は〇〇の力を身に付けさせることです。」→目標の明確化
- ② 目標から子どもがわかりやすい学習課題をつくる。
- ③ この時間のまとめ・ふりかえりを教員が想定する。
- ④ その力をつけるためには、どのような中心発問が必要かを考え、構成を工夫する。

授業の幹は何であることを教員が設定し、それを獲得するためには何が必要かを考え授業を構成することが大切です。

45分、50分の授業で大切にしたい4つの学習活動を確実に取り入れるには、上手に枝葉をそぎ落とすことが大切です。

Ⅱ-2 大切にしたい4つの学習活動

課題をつかむ

P.9 へ

「学習課題」は、「なぜだろう?」(不思議さ)、「何とかしたい!」(必要感)と思わせる意欲を高める要素が含まれた、教材が本時のねらいを達成できる問いの形に表現したものです。まずは、学習に対して、子どもが「自分ごと」として課題を受け止めることが大切です。このような解決したくなる「学習課題」に出合わせることは、子どもが主体的に取り組む授業の大きな手だてになります。

(そのとき、子どもたちが課題を解決するよりどころとなるのは、既習事項と結びつける「見通しをもたせること」です。解決の糸口がみつかりとさらに意欲が高まります。)

自力解決

P.11 へ

子どもは、既に持っている経験や知識を使ってひとりで課題に向き合い解決する時間の中で、基礎的・基本的な知識・技能を活用する思考力・判断力・表現力を育みます。ここで大切にしたいのは、ただ問題を解くだけの時間ではなくて、学習課題の解決の方法です。子どもたちは、文や絵や図など多様な表現方法で解決の方法を表します。ここで「自分の考えを書く力」を高めます。

学び合い

P.12 へ

学習課題に沿った学び合いをすることにより、友だちの考えを知り、理解することや、比較・検討することが可能になり、よりよい考えに高め深めます。そのためには、自分の考えを発表し友だちに伝える「話す」活動が重要です。「話し方」「聞き方」の型は、考えをつなぐ、深めるスキルになるので指導することが大切です。

まとめ・ふりかえり

P.14 へ

授業のまとめとして、友だちと協力して導かれた結論をクラス全体の成果として共有し、「分かったことを書きましょう。」と具体的な指示をして、1時間の学習で学んだことを自分の言葉でまとめ、ふりかえらせます。

課題をつかむ



課題の提示の仕方、見通しの持たせ方

子どもが主体的に授業に取り組むためには、学習課題を「自分の問題」として捉える必要があります。そのためには、課題の中に本時のねらいを達成させ得ること、教科としての価値、学びへの興味・関心・意欲につながる要素を含んでいることが重要です。

課題をつかむ

課題の提示

- 本時の目標を明確に示す。
- 具体物や ICT 機器を活用して、課題をとらえやすくするとともに、子どもの意欲がわくような工夫をする。

☆ 課題設定のポイント

- ・ 子どもの興味・関心・意欲を呼び起こす課題設定であること。
- ・ 多様な考え方ができる課題設定であること。
- ・ 日常生活に基づいた身近な課題設定であること。

授業をつくってみよう 小学校6年生 社会科

鉄砲伝来

1543年、1隻のポルトガル船が種子島に流れ着き、鉄砲が日本に伝わる。織田信長は、いち早く戦いに鉄砲を取り入れ、長篠の戦い（1575年）において武田勝頼の騎馬隊に圧勝。



長篠合戦絵図（徳川美術館蔵）

【学習課題】勝ったのは、右側だと思いますか、左側だと思いますか。
なぜそう思うのか、図の中からそのわけを見つけましょう。

見通しをもつ

見通しの持たせ方

- 課題に向きあえるように、現段階で子どもが自分にできること・できないことは何かをつかませる。
- 課題の解決のために、既習事項やこれまでの経験で何(知識・技能)が使えるのかを考えさせる。
- 解決の糸口をつかむことができるように、方法や結果の予想を交流させる。

☆ 発問のポイント

これから何をすればいいのかがわかる**明確な問い**が、見通しを持たせることにつながります。

- どのような方法で考えますか
- 何を使って考えますか
- いくつぐらいになりますか
- どのような結果になるのでしょうか



「これまでの戦いに鉄砲はなかった！」ことから【子どもが知りたい事】考えさせる。

- ・ どうして鉄砲が、ここにあるの？
- ・ この鉄砲はどうしたの？自分達が発明したの、それともどこから持ってきたの？（買ったの？）
- ・ この図は、誰と誰の軍隊が戦っている様子を表しているの？
- ・ この鉄砲を使っている軍隊は誰の軍隊？
- ・ 左側のかしこい戦術を考えた人は誰？

それを教科書や資料集、図書館などで調べさせる。

⇒ 教えた事を子どもの学びたい事に変える。

見えるものから見えないものへ広がりを持たせる。

- ・ 織田信長はどう思っただろうか？
- ・ 他の戦国武将たちはどう思っただろうか？
- ・ 現代の世の中で同じようなことは起こっていないか？

学習課題は展開の工夫が大事

例 中学校 理科 大地の作り方と変化

「8個の岩石を観察し、理由をつけて3種類に分類しよう。」

中学校 体育 ゴール型バスケットボール

「ゴール前の空いている場所をカバーするチームの作戦を考えよう。」

国語や美術などでは単元を貫いた学習課題の設定が大事

例 中学校 国語 走れメロス

「走れメロスの構成や展開、表現の仕方を批評しよう」

この目的意識を持ちながら学習を深めて最後に批評をまとめ交流する。

自力解決



一人で課題に向き合わせる

「問題を解く時間は確保しています。それとどう違うのですか。」と、よく聞きますが、「問題を解く時間」＝「子どもたちが一人で考える時間」では、ありません。

「子どもたちが一人で考える時間」は、本時の学習課題の解決の方法や、基礎的・基本的な知識や技能を活用する思考力・判断力を獲得するための時間です。

自力解決の時間の確保

- 一人で課題に向き合う時間は、十分に確保する。
⇒授業時間の 3 分の 1 から 4 分の 1 が目安
- 子どもに委ねるという授業者の姿勢で臨む。
- 一人で課題に向き合う時間が始まれば、新たな発問や指示の追加はしない。
⇒状況に応じてヒントカードなどを用意し、必要であれば提示する。
⇒解決する時間の個人差に対応できるように次の課題やプリント等を準備する。
- 多様な考えの表現方法を認める雰囲気をつくる。
⇒文章、絵、図、数式、操作等

机間指導など個に応じた支援

- 一人ひとりの実態や特性を把握する。
⇒子どもの考え方を予測する。(既習事項や生活経験からきつこう考えるだろう)
- 一人ひとりが自信をもてるような、机間指導での助言や評価をする。
⇒全体だけでなく、書き留めている記述の着眼点を評価し、言葉にだして褒める。
(この考え方は素晴らしいです。あと、この点から考えてみよう 等)
- 子どもの思考を助ける学習教具(具体物・半具体物・用具・器具)やワークシート、ヒントカード、発展問題等を幅広く、学年や担当者と協力して準備する。
⇒助言の必要な子どもだけでなく、課題を終えた子どもへの対応準備もしておく。
- 子どもたちが思考の過程で、解決し、結論にたどり着いたときの喜び(達成感、成就感、満足感)や、解決に至らなかったときの悔しさ(失望感)を理解し共感する。
⇒結果だけでなく、過程を重視する。
(あきらめずに色々な方法で考えていますね 等)

分からない、解決できない悔しさに共感し、受け止めながら、小さなことから自分一人の力で解決できた経験を積み重ねさせましょう



学び合い



考えをつなぎ、深めるために

子どもたちが互いに意見を出し合い課題解決を行うことには、主に3つの意味があります。

- ・ **主体性**→他の意見を尊重して、聴く姿勢を育てることにより、自分の考えや意見も大切にされ、自信を持って話すことができる。
- ・ **思考力・判断力・表現力**→課題解決のため意見を重ねること、自分の意見に確信を持って、他の意見により新しい発見があるなど学びが深まる。
- ・ **人間関係形成能力**→様々な仲間と関わり折り合いをつける経験を通して、より良い人間関係が築かれ、より好ましい集団づくりにつながる。

学び合いの構成と特徴

○ペア学習 互いの考えや意見を自由に話し合う場合

- ・ 全員が短時間で考えを表出できる。
- ・ 自分の考えを確かに行うことができる。
- ・ グループのように、個が埋もれない。

○グループ学習(3、4人) 複数の意見や考えを伝え合い、自分の考えと比較、検討する場合

- ・ 仲間の意見を客観的に聞き、相違点、共通点に気づくことができる。
- ・ 1つの考えを作り上げる活動ができる。
- ・ 司会や報告、まとめなど役割を学ぶことができる。(3人グループの段階も必要)

○全体での交流、学び合い、練り合い 自己や集団の考えを深め、高め、発展させる場合

※ 1人→ペア→全体 1人→グループ(3人、4人)→全体 グループ→1人→全体
学習課題や子どもの実態に応じて、学び合いの場を構成することが大切です。

学び合いの型を提示して指導

指導者が本時のねらいである子どもにつけたい力の実現のためには、どんな学び合いが有効なのかを考え、学び合いのねらいを子どもに伝えて指導する。

尊重型…様々な意見を知り、話し合いを行う学び合い(オープンエンド的)

- ・ いろいろな方法や意見があることに気づかせる。 道徳等での活動

順位型…相違点に着目し、順位付けをし、いい方法を見つけ出す学び合い

- ・ どの方法が1番早く正確にできるのか気づかせる。

(例)ランキング、**はかせ**(速い、簡単、正確)、**わかい**(わかりやすい、簡単、いつでも使える)

分類型…分類する視点や関連性に着目させ、調査結果の類型化をねらう学び合い

- ・ カテゴリーに見出しを付けながら類型化させる。
- ・ 肯定、否定派に分ける。4カテゴリーに分ける。

集約型…共通性に着目させ、一つの考えにまとめる学び合い

- ・ たくさんの意見の中から、概念化、一般化させる。

話し合い、学び合いにおける指導を行う時のポイント

☆友だちの考えと自分の考えをつなぐ指導のポイント

- ・友だちの考えを大切にすることで聴かせる。
- ・友だちの考えの良さを見つけながら聴かせる。
- ・友だちの考えと比べたり関係づけたりしながら聴かせる。

考えを深める板書やグループまとめの書き方

- | | | | | |
|----------|---------|--------|---------|-------------|
| ①分類・整理 | ②順位づけ | ③交流 | ④関連づける | ⑤強調する |
| ・表にまとめる | ・順に書く | ・付箋に書く | ・線を結ぶ | ・線で囲む |
| ・図に表す | ・番号をつける | ・付箋を移動 | ・矢印をつける | ・色づけする |
| ・言葉を記入 | | | | ・アンダーラインを引く |
| ・印や記号を記入 | | | | |

話し合い、学び合いにおける指導助言の仕方(こんな場合の対応)

全体での発言が一部の子どもに偏って授業が進められ、一人ひとりの考えが深まらない場合

一人ひとりが考えをまとめられる時間を確保し、できるだけ多くの子どもに発言させる。机間指導中に子どもの意見を教員が把握し、課題に沿った意図的な指名を行う。

話し合いのポイントがずれ、子どもの考えに深まりがなく、展開が見られない場合

本題が何であるかを確認し、それまでの意見を整理し、考え方や場面を変える助言をする。

グループでの話し合いがうまくできない場合

司会、記録、まとめ、ほめ役など役割を決める。また、発表の順番や、話し合いの進め方、出てきた意見のまとめ方などその場で指導する。

意見をうまく表現できない子どもがいる場合

うまく言えない子どもの考えを聞くことに心がけ、発表することの大切さを理解させる。意見を発表する意義について説明する。

☆学び合いの評価のポイント

- ・「話し合ったこと」の価値を実感できるような評価を心がける。
- ・学び合いで、子どもがどのような参加ができ、どんなスキルが身についたのかの評価も行う。
- ・人との意見のまとめ方や折り合いの付け方など人間関係形成能力の評価も行う。
- ・子ども自身にも、学び合いについてどのように参加ができたかの評価をさせる。

まとめ・ふりかえり



学んだことをまとめる・ふりかえる

子どもが、自らの言葉で学習内容をまとめることは、学習内容の理解を深め、定着させる上で極めて有効です。毎時間必ずこの活動を取り入れられるように工夫しましょう(参照Ⅱ1)

また、学んだ筋道や考え方をふりかえることによって、子どものメタ認知(※注)能力が向上し、次の学習活動において、よりよく問題解決を行うことができるようになります。

効果的なまとめ・ふりかえりを行うために

○授業の学習課題に対応させて、まとめさせる。

「今日のめあては何でしたか？めあてと照らし合わせ、分かったことを書きましょう。」

○自分の考えた道筋をふりかえらせる。

「なぜ分かったか詳しく書きましょう。」

○次の学習への関心・意欲を引き出す。

「分かったことをもとに、どんなことが言えますか。」

○手本となるようなまとめ・ふりかえりを例示する。

「〇〇さんは分かったことを図や表で説明していました。」

子どもと子ども、子どもと学び、子どもと指導者をつなげる

○子どもたちが学習をまとめ、ふりかえることにより、自らの成長に気づくことを促すとともに、友だちのがんばりや良さを見いだし、ともに学ぶことの意味を実感する機会が生まれます。

○指導者の評価コメントによって、子どもたちが「自分の考えや思いが伝わった」、「自分のことを見てくれている」と感じることで、学習への動機づけを強めます。

例) Aさんは友だちの考えを聞いて、今日の課題を解くことができたのですね。

Bさんは、グループの司会が初めてだったけど、みんなとしっかり話し合えてうれしかったのですね。

ふりかえりを授業改善に生かそう

○関心・意欲・態度の評価に

○一人ひとりの理解度の把握に

○授業の目標にどのくらいの子どもが達成できたのか

○指導改善や次の授業のヒントに

語句説明:「メタ認知」 ※メタ認知の「メタ」とは「高次の」という意味。上位概念をあらわす。

自己を客観的に見つめ、よりよい問題解決に向けコントロールする認知のはたらきを指す。何かを実行している自分の頭の中で働く「もう一人の自分」と例えられることもある。

Ⅲ 授業を支える教員のスキル

子どもたちが学ぶのは、授業の「内容」だけではありません。教員の表情や語調・態度・雰囲気などの非言語コミュニケーションを通じ、「隠れたカリキュラム」として様々なことを学び取っています。教材や発問に工夫を凝らすのと同じくらいに、日頃の立ち居ふるまいが子どもたちに大きな影響を与えることを意識しておくことが大切です。子どもたちはいつもあなたの後姿を見ています。

Ⅲ-1 教員の立ち居ふるまい



基本

- 子どもたちの前では、いつも笑顔で明るくふるまい、子どもたちをリードしていきます。
- 一人ひとりの日々の様子や生活背景など、子ども理解を深める意識を持ちます。
- 一人ひとりのことを考え、子どもが言おうとすることを理解し、受容するとともに公平な態度で接します。
- 子どもたちに愛情をもって接します。

態度・表情・話し方

- 強調するときは胸を張り、一步前へ。興味を引きつけるときは少し下がって声を落とします。
- 子どもが話しているときは、子どものほうに体を向けます。
- 声のトーンを下げ、授業のテンションを落とし、お互いの声を聴き合うことができるしっとりと落ち着いた雰囲気を作ります。しっかりと伝えたいときには少しスピードを落として話します。
- 標準語を使うことによって、授業時間とそのほかの時間との違いを明確にします。
(基本は丁寧語)
- 前向き(プラス)の言葉で話します。
- 子どもに対して相手を過度に高める言葉や「友だち口調」等なれなれしい言葉は使いません。
- 必要なときには子どもにも「ありがとう」「ごめんなさい」を。

「よく練習したことが結果につながりましたね。」
「失敗したことを次に活かそうとしていますね。」

ほめ方・叱り方

- ほめるときは、迷わずにほめます。
- 叱るときは、深慮して叱ります。
- トラブルの対応は今すぐにやります。

やる気を止めてしまう叱り方

- ① ほかの子どもと比較する
- ② どこがいけないのか理由を言わない
- ③ ペナルティを前面にだす
- ④ 感情的で一方的

☆指導者としてふさわしい服装等を！

・時、場所、場面に応じた清潔で好感のもてる服装等を心がけましょう。

Ⅲ-2 授業の流れが分かる、構造化された板書

板書は、視覚化することによって子どもの思考を深めたり、課題解決したりするためのツールです。音声は消えますが、板書は残ります。この「見える」ことと「残る」ことを最大限に生かし、同時に授業を構造化していきます。



板書の意義

○音声言語の視覚化の機能

- ・ 正確かつ明瞭に伝達できる。
- ・ 活動中も課題や留意点などを意識させることができる。

○集団思考のノートの機能（形成機能）

- ・ ねらいが共有化できる。
- ・ 思考や判断のヒントとなる。

○理解・定着機能

- ・ 知識や概念などの整理、構造化ができる。
- ・ ふりかえりをさせることができる。

板書の基本

○楷書で、丁寧に書く

○学年や実態に応じた漢字の使用や文字の大きさ、1行の文字数などに配慮。

- ・ 既習漢字を使う。未習漢字には、読み仮名をつける。
- ・ 字の大きさの目安は、一般的に低学年は12cm 四方、中学年は10cm 四方、高学年・中学校では8cm 四方面程度を目安に。

○見えやすさを意識して書く

- ・ 照明や日光、色の見え方に困難を感じている子どもに配慮して、文字は基本、白・黄色を使う。
- ・ 色マグネットなどを小見出しにつかう。（問題点、まとめ等項目を決めて使用）

**掲示コーナーを
つくってみよう**

「見てみようコーナー」などと銘打って、授業中に出た、考えや方法などの板書内容を、教室や廊下などに掲示して、以後の学習に活用する取組をすることで、子どもたちにとって、復習にもなります。

記録の
すすめ

掲示の
すすめ

**毎日の板書を
デジタルカメラで**

「板書を見れば、授業が分かる」と、よく言われます。子どもたちにとって、分かりやすい板書にするため、板書を記録することで、自分の授業の課題が見えてくることもあります。

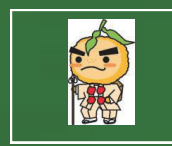
わかりやすい板書例

分かりやすく赤い線で囲む

説明に必要な図表、写真など

学習課題

- ・「なぜ」「どのように」「何」
など子どもの問いの文言



見通し・本時の流れなど



考えや分かったこと



まとめ ●学習した子どもが、自分の言葉で

- ・一人ひとりが分かったこと、印象に残ったこと、
大切だと感じたことには違いがあります。子ども
の表現方法で自由に書かせることが重要！

→挿絵、登場人物の絵カード、書き出しの言葉、キーワードなどの活用も

- ・色チョークで囲む

ふりかえり ●子どもに活躍させる場面を

☆子どもを参加させる板書に！

- ・できるだけ子どもの言葉を活用
- ・子どもの考えや方法などを授業で生かす。
→カードや小ホワイトボードに記入させ、発表後提示（可能なら名前も）等の工夫も。

電子黒板の活用

○画面上で直接操作でき、ピンポイントで拡大提示することもできる。

○写真や映像などへ画面からの書き込みができる。

○提示画面とともに、書き込み内容も保存できる。

○子どもの見ている教科書と同じものを前に提示することができる。



1 思考を深める

教科書や資料集を最初に見る授業は、解説や正解も同時に提示してしまいます。ところが、電子黒板を使うと、1枚の写真やイラスト、グラフなどのシンプルな「素材」だけを提示できるので、思考を深める場面をつくる授業展開が可能になります。

2 試行錯誤ができる

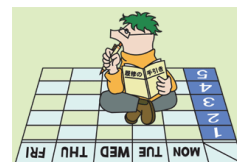
素材上に子どもたちの意見を聞きながら何度も書き込みを加えていくことで、試行錯誤のある授業の展開が可能になります。

3 言語活動の充実につながる

実際に子どもたちが前に出てきて電子黒板を使いながら、自分の考え・意見を述べることで、言語活動の充実につながります。

Ⅲ-3 学習意欲を高めるノート指導

ノートは、自分の思考を整理し、まとめるツールです。
自らの学びを記録することで、自己評価ができます。



ノートの意義

- 学習の理解が深まり、定着に役立つ。
- 考えが広まったり、深まったりする。
- 自分の考えが整理され、説明にも役立つ。
- 復習時の参考書や資料として活用できる。(学びの連続性)
- 自己評価ができる。

教員の視点から

- 子どもの学習状況を把握し、効果的に学習を進める。
- 自ら考えたことや、グループで話して気づいたこと等をノートに書くことで、子どもの主体的な学びにつなげる。
- 予習や復習等と関連させて、子どもの学習習慣の改善ができる。

効果のあるノートづくり

The diagram shows a notebook with the following sections:

- 学習日時** (Learning Date/Time)
- 学習課題 (めあて)** (Learning Task/Purpose) - Highlighted with a red box.
- 確認問題** (Confirmation Problem)
- 学習内容** (Learning Content) - Includes symbols like ○▽×□☆ and a series of dots.
- ふりかえり (感想、自己評価)** (Reflection/Opinion, Self-Evaluation)
- 自分の考え、友だちの考え** (My thoughts, Friends' thoughts)
- 宿題、家庭学習** (Homework, Home Learning)
- 学習のまとめ** (Summary of Learning) - Highlighted with a blue box.

子どもの発達
段階に適した
ノートを準備！
【マス目(大小)
罫線のみ等】

必ず記入する
事項を明確に
□学習日時
□学習課題
□考え(自他)
□まとめ等

ノートガイダンスを
実施し、書く内容
や書き方のルー
ル等を確認する。

□めあて等は、
赤鉛筆・赤ペン
で囲む。
□間違い直しは、
消しゴムで消さ
ずに近くに訂
正を記入させ
る。

☆ノート指導のポイント

- ・小学校高学年以降は、自分の工夫を書き込んで、自分なりの参考書になるようなノート指導を行う。
- ・小中の連携で、継続したノート指導の実現に結びつける。
- ・ノート指導は、書く力の育成のために、重要なツールとなることを常に念頭に置く。

Ⅳ 系統的、継続的に育てたい子どものスキル

Ⅳ-1 児童・生徒の学ぶ姿勢

子どもが学校・授業を大切にすることを育む



子どもと指導者との挨拶や言葉づかい、子どもの授業に向けた準備物や身の回りの整理整頓、こういった何気ないふるまいに子どもの学びに向かう姿勢が表れます。それらを整えることにより、学びに向かう心構えが生まれます。

授業改善や集団づくりにおける土台としての「日頃からの学ぶ姿勢」は、指導者からの継続的な意識づけがあってこそ育まれます。このことで子どもは指導者を信頼できる存在と認識し、仲間とともに意欲をもって学習に臨むことが可能になります。

「礼に始まり礼に終わる」の心を持つ

○「おはようございます！」と元気に挨拶をする子どもをめざす。

- ・元気がなさそうなら、「元気？」「どうしたの？」といった声かけをする。
- ・大人から子どもへの「おはようございます」も大切な指導になる。

○授業の初め、終わりには「お願いします」「ありがとうございました」と言える子どもをめざす。

- ・一緒に学ぶ仲間、指導者に対する感謝の気持ちを表す。
- ・休憩時間と授業時間の気持ちを切り替えに効果がある。
- ・しっかりと発声することで積極的に授業に参加する姿勢を引き出す。
- ・全指導者が一致したスタイルの実践が学ぶ姿勢の柱となる。

「準備万端」の心を持つ

○授業開始前に学習用具を準備する子どもをめざす。

- ・机上には必要な分だけの筆記具、教科書、ノートを整然と置く。
- ・授業準備の徹底を通じ、何事も準備が大切であることを伝える。

○予習、復習ができる子どもをめざす。

- ・予習、復習が授業理解を支え、学習意欲の向上に結び付く。

「整理整頓」の心を持つ

○ロッカーや靴箱を整理できる子どもをめざす。

○清掃活動の意義を理解し、進んで行う子どもをめざす。

- ・整然とした空間で、安心して学習に向かわせる。
- ・ルールやマナーの順守を徹底する。
- ・学校や教室が、公共の場所であるとともに、自分にとっても大切な場所であるという意識を育む。

Ⅳ-2 自分の考えを書く活動の手立てについて

PISA型読解力に示されている通り、文章や資料、メディア等を読み理解するとともに、それを利用し熟考する力は大切な力です。しかし、今はさらに自分の考えや判断を表現する力が求められています

授業の中で「書く」活動は、自分の考えをまとめて記録し、表現し、伝えるために、非常に重要な言語活動であり、学習指導要領で重視されている思考力・表現力の育成に深く関わっています。しかし、「書く」ことについては苦手意識を持っている子どもも少なくありません。日頃の授業から、発達段階に応じて「書く」活動を効果的に取り入れていくことによって、子どもたちの「書く力」をつけていくことが大切です。



「書く」ことへの意欲を持たせる

「書く力」のもっとも基本となるのが、書くことへの意欲です。書きたいと思う気持ちを育てるためには、「書いてよかった」と感じる機会を多く設定することが必要です。特に小学校低学年では、教科書の書き写しなど、まずは意欲的に書いたことをほめ、その上で、字を丁寧に書く習慣を身に付けさせることが大切です。字を丁寧に書くことによって、達成感を持たせるように指導します。

(活動例) 文字の練習、教科書の書き写し、日記など

(チェックポイント)

- ☐ 書くことに意欲的に取り組んでいますか。
- ☐ 筆順やとめはね、字の大きさや位置などに気をつけて、丁寧に書けていますか。

目的に合わせて書く

小学校中学年からは、目的に合わせて書く力が求められます。「わかったこと」を書くのか、「思ったこと」を書くのか、または記録をとるために書くのか、誰かに伝えるために書くのかなど、書くことにはさまざまな目的があり、それによって書き方も変わります。問いに対する答え方や、事実と意見の区別など、授業の中で適切に指導することが必要です。「何のために書くのか」を明確に提示した上で、目的に応じた書き方を指導します。

(活動例) 授業ノート、テストの記述式問題、授業のふりかえりなど

(チェックポイント)

- ☐ 目的を理解して書いていますか。
- ☐ 目的に合わせて書き方を工夫していますか。

(問いに対する答え方、事実と意見)



読み手を意識して書く

小学校中学年から高学年にかけては、書くことの目的とともに、読み手を意識することが大切です。手紙等に用いる言葉づかいや、レポート等で読み手がわかりやすいように工夫して書くことなどを指導する必要があります。読み手を意識して書くことは、自分の考えを客観的に見直し、考えを整理することにもつながります。また、読み手からの評価が次に書くことへの意欲につながるので、読み手の感想をフィードバックする機会も大切です。

(活動例) お世話になった人への手紙、自由研究レポート、ブックレビューなど

(チェックポイント)

- ☐ 読み手を意識して書いていますか。
- ☐ 読み手にとってわかりやすいように工夫して書けていますか。
- ☐ 自分の考えを客観的に整理することができていますか。

効果を意識して書く

小学校高学年から中学生にかけては、書くことの効果を意識する必要があります。わかりやすいだけでなく、伝えたいことをより強く印象づけたり、図表などを用いて視覚的に表現したりすることなど、より書き手の意図が反映されるための工夫について指導します。情報を精選し、構成を考え、さまざまな表現上の技法(要約、強調、対比、反復など)を用いて、効果的に自分の考えを表現することができるような書き方について指導します。

(活動例) 創作活動、スピーチ原稿、プレゼンテーション、新聞作りなど

(チェックポイント)

- ☐ 効果を意識して書いていますか。
- ☐ 情報の活用、構成、表現上の技法など、効果を意識した工夫が見られますか。

発達段階を意識して継続的に、かつスパイラルに指導しましょう。

1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	7 年	8 年	9 年
「書く」ことへの意欲を持たせる								
	目的に合わせて書く							
		読み手を意識して書く						
				効果を意識して書く				

IV-3 話す力・聞く力



「話す」 自分の考えを伝える活動

学習の中で自分の考えをもったところで、その考えを発表し友だちに伝える「話す」という活動が重要になってきます。そこで、まずは「話すスキル」である話型を指導して、子どもたちが自信をもって自分の考えを発表できるようにしていきます。様々な話型の習得は、子どもの思考のスキルを増やすことにつながります。話型は、国語科の指導に併せて行うと効果的です。

発達段階に応じた話型

ブロック	学年のめやす	話型
前期	1・2年	・ ていねいな言葉で最後まではっきりと話す。 「はい、～です。」「はい、～と思います。」 ・ わけを話す。 「わけは～です。」 ・ 順番に話す。 「まずは（はじめに）～、つぎに～です。」 ・ よいところを話す。 「～というところがいい考えだと思います。」 
	3・4年	・ 理由や事例をあげて筋道立てて話す。 「わたしは～だと思います。その理由は・・・だからです。」 ・ つけたして話す。 「〇〇さんにつけたして～だと思います。そのわけは（理由は）、・・・だからです。」 ・ よさについて話す。 「〇〇さんの発表で、～が分かりました。」
中期	5～7年	・ 根拠となる事実を明確にして話す。 「そう考えたわけは（理由は）～です。」 ・ 順番に話す。 「まずは～、次に～、最後に～です。」 ・ 相手に意図が伝わるように話す。 資料を示したり、例を示したりしながら話す。 ・ 相手の反応を踏まえながら話す。 聞き手の話の受け止め方や理解の状況などに注意する。
後期	8・9年	これまでに学習してきた話し方を活かして話す。 ・ 中心部分と付加部分との関係がはっきりわかるように話す。 ・ 目的や状況に応じて、資料や機器などを効果的に活用して話す。 ・ 場の状況や相手の様子に応じて話すとともに、敬語を適切に使う。

「聞く」から「聴く」態度を育む

「良い聞き手は、良い話し手を育てる」という言葉があります。「聞くこと」の習得は「話すこと」を向上させ豊かにしていくことにつながります。相手の話すことを大事にし、すすんで「聴こう」とする心がけが大切です。

- ・異なる意見や考えを共感的に受け止めることができる子ども
 - ・一人ひとりの考え方の違いを認め合える子ども
 - ・わからないことや、間違いも否定的にとらえない子ども
- 人間関係の築かれた学習集団は、傾聴する雰囲気を生み出します。

発達段階に応じた聞き方

ブロック	学年	聞き方
前期	1・2年	・ 静かに最後まで聞く。 ・ 相手の顔を見て聞く。 ・ うなずきながら聞く。
	3・4年	・ 相手の顔を見て最後まで聞く。 ・ 質問や感想が言えるように聞く。 ・ 必要に応じて、メモがとれるように聞く。
中期	5～7年	・ 相手の顔を見て最後まで聞く。 ・ 話の中心に気を付けて聞く。 ・ 質問や感想が言えるように聞く。 ・ 必要に応じて、メモがとれるように聞く。 ・ 自分の考えと比べながら聞く。
後期	8・9年	・ 自他の共通点や相違点を聞き分けて、自分の考えを深める。 ・ 話の構成や筋道を捉え、意見の中心がどこにあるのかを聞き取る。 ・ 相手の立場や考えを尊重しながら聞く。

発達段階に応じた順序性を考えて、活用できる力がついたかを確かめながら9年間の学習活動に取り組みましょう！



★「話し方」「聞き方」のポイントを掲示するのも手立てのひとつです！

「話し方 あいうえお」「聞き方 あいうえお」

あ 相手の顔を見ながら
い 言う順番を考えて
う うまく伝わるように
え 笑顔で
お 終わりまではっきりと

あ 相手の顔を見ながら
い いいところに気づいて
う うなずきながら
え 笑顔で
お 終わりまでしっかり

(例)「話し方あいうえお」・「聞き方あいうえお」

